

『コンヴェンション経済学と資本主義の変容： 豊穡化について』

クリスチャン・ベッシー著
須田文明*〔訳〕

Christian Bessy (2019) "Economie des conventions et transformations du capitalisme, enrichissement", *Revue Française de socio-économie*, (à paraître) ©Christian Bessy

交換を、個人の間での合意のみに基づかせる傾向にある新古典派経済学とは逆に、コンヴェンション経済学 EC が出発点とするのは、製品の品質を構成しているコンヴェンション (共有信念＝慣行) なしには市場交換は不可能である、という考え方である。こうした品質問題についての、また判断装置に依拠する格付け過程 (Boltanski et Thévenot, 1991) についての長い一連の研究の後に、EC はここ数年来、モノについての言説の展開によって (Eymard-Duvernay, 2012)、価値付け *mise en valeur* 形態をめぐる、特定アクターの価値付与 *valorisation* 権力についての考察を開始した。社会的現実の構築において批判が果たす役割を単に精緻化するだけでなく、こうした考察は、政治的变化 (これまででは交換の枠外におかれていた特定のモノの商品化を促す (Thévenot, 2015)、もしくは所得や資産の不平等な増加を促す) についての考察にも対応しているのである。この場合、大物実業家やトレーダーに支払われる報酬について、競売における芸術作品の相場について考えることができる。これらは強い不正感もしくは恣意的評価とまでは言わなくとも、少なくともある形の不釣り合いを示している (Steiner, 2011)。

しかし価格の不釣り合いが、資本主義の変容と利潤源泉の移動を説明する一つのやり方であると

しても、EC がより一般的に、「価値の理論」と再び結合しようとしてきたのは、その内在的効用によって財の価値を考察する支配的経済学の潮流と断絶することによってである (Orléan, 2011)。こうした新しい展望は、財の価値付与様式の複数性に、多様な市場での価格形成メカニズムに、——また経済社会学により切り開かれたアプローチにしたがって——様々な意味作用 (価格がその参加者に対して有する) (Velthuis, 2007) に関心を向けるように EC を促した。価値付与過程のこれらの分析はデュルケムにより刺激される価値の社会的構築の社会学的研究と関連づけることができ、より現代的に、アパデュライの人類学的研究と関連づけることができる。後者の研究は異なった価値付与空間において経済的事物が流通する際の条件を探索するのである。

経済学と社会学を対話させる学際的なこうした視角にしたがって、資本主義の変容の批判的展望を豊富にするべく、様々な分析が展開してきた。特定の分析は、モノがどんな価値を有するか、もしくは、何が共通善を構成するか、を決定する権力をつまみアクターの間での非対称性を、したがって民主主義の機能不全を生み出す権力を強調する (Eymard-Duvernay, 2012)。経済の金融化について、また企業における株主の価値付与権力を考え

* 農林水産政策研究所 〒100-0013 東京都千代田区霞が関 3-1-1

てみよう (Favereau, 2014)。もしくは評価のコンヴェンションを定義し、普及させることに資する市場の媒介者の価値付与権力について考えてみよう (Bessy et Chauvin, 2013)。

倫理的で政治的な展望を保持するこれらの研究に対して、より微細にマチエールの襞に入り込むことで、より根本的に、モノの価値づけ形態と、その差異と同一性の形態に関心を向けるアプローチを区別することができる。その価値づけを裝備する事物についての妥当な「手がかり」の構築をめぐる研究に言及することができる。異なった流通空間へと事物を方向付ける競売人によりなされる評価場面の観察が示しているように (Bessy et Chateauraynaud, 1995)。しかしその価格を増加させ、したがって、それを利潤の源泉とするべく、自らの豊穡化に参画するモノの価値づけ形態に、より体系的に研究を集中させることができる。まさに商業空間を考慮することで、こうした因果連関の分析が、Boltanski et Esquerre (2017)の著作 *Enrichissement, une critique de la merchandise* (『豊穡化、商品批判』)の中心にある。それは、富の創出の新しい源泉についての体系的考察の成果であり、(価格の正当化に関する彼らの調査の出発時点での特権的な観測点を形成していた)現代芸術の領域も含んでいる。こうしてこの著作は、現実の社会的構築において価格形成が演じる役割についての社会学分析の不十分さと、価格問題へと価値の問題を縮減する経済理論により提案される取り扱いに対する不満足に対応している。

より根本的に、支配的経済学であれば言語論的転換を受けることなく、モノへの実証主義的立場に留まっていたことであろう。ところがこの本の利点はモノの価値づけの言説の分析を特権化し、言語的装置の研究に基づいて EC を豊富にすることにある (もっとも著者たちによってこうした目標が明示的に追及されていないとしても)。さらに、マクロ歴史の変容の解明において、システム論的構造主義の形態を追求しつつも、こうした立場によって、「ミクロ=マクロ」的結合に関して EC を検

討することができるし、資本主義進化に関して EC が何を説明できるか (この経済学の通常の言葉遣いにはないタームである)、について EC を検討することができる。EC の中心部は、レギュレーション理論に倣った資本蓄積体制の変容に依拠した大きな話題とは逆に位置づけられてきた。コーディネーション様式の複数性の分析と、それが生み出す批判的緊張の分析が特権化されてきたのである。

ボルタンスキーらの書物について紹介する前に、我々は品質のコンヴェンションの (Eymard-Duvernay, 1989)、もしくは生産の世界 (Salais et Storper, 1993)の複数性についての画期的な研究に立ち返ろう。それは、こうした研究が国家介入の変容と関連した生産的活動の組織化様式の変化をどのように考慮したかを示すためにである。次いで我々は特定の経済アクター、とりわけ市場の媒介者の評価権力の分析を延長させる。第三部では、我々は Boltanski et Esquere (2017)の著作を提示し、これが、資本主義の変容のその理解において EC をいかに豊富にすることができるかを示すが、それは我々が、生産様式の変化というよりもむしろ市場空間の変容にとりわけ関心を向けることによってである。経済学と社会学との間での交流の肥沃さを示すために、コンヴェンション経済学者の特定の研究と、この30年間のボルタンスキーの研究との間の相互作用を考慮することが重要である。以下の二つの部で提示される研究の選択は、こうした導きの糸に沿うのであり、ECの研究全体を網羅するものではない。

1. 品質の政治経済学

その起源から、EC は二つの主要な入口から、製品の品質についての一連の重要な研究を推進してきた。一つの入口は、主として、他者の活動に関する不確実性の取り扱いの観点から着手される、労働と品質のコンヴェンションの分析を特権化させてきた。第二の入口は、活動のコーディネーション形態の効率性と公正さの間での緊密な関連づけを強調する。EC はまた、より状況に位置づけられたコーディネーションのコンヴェンションにも

関心を向ける。いずれの場合も、作用している制度的ダイナミズムについて、また資本主義の変容についても検討することができる。

(1) 製品の品質のヴァリエティ

第一のアプローチは Salais et Storper, 1993 (『生産の世界』) の著作により開始され、これは不確実性の条件下での活動の様々なコーディネーション形態と、不完全なルールと偶発的な品質の定義との様々な形態を対照させる。活動のための解釈図式として定義されるコンヴァンションは、生産的コーディネーションの中でダイナミックに結合される、労働関係の三つのモメント(労働者採用、労働の実施、生産された製品の販売)を接合させることを可能とさせる。4 つの生産の世界が二つの軸の交差にしたがって区別される。生産者が、(専門知という意味での) 知識への人員の種別化に基づいた生産手法を選ぶのか、それとも、標準化に基づいた生産手法を選ぶのかに応じて、一つの軸は生産者に関連づけられる。需要者が、自らに専用的である製品の需要を表明するのか、それともジェネリックな製品に準拠して、生産者のなすがままにされるのか、という選択にしたがって、もう一つの軸は、需要者に関わる。こうして「工業的生产の世界」はジェネリックな製品の標準化された生産と関連し、「インターパーソナルな世界」は、生産者とクライアントの間での相互的な調節過程に依拠する(両者がそれぞれ、製品の品質について自らのパーソナリティを刻印することができる)。「市場的世界」は規模の経済から利益を得るが、それはクライアントの変動的需要に適応するべく、少ない品目についてである。最後に「非物質的世界」において製品とサービスは、それぞれ極めて差異化されており、すべての人に向けて作られた財に、生産者が自らのパーソナリティを与える(ハイテク製品やデラックス製品の場合のように)。

分析がアクターの間でのコーディネーションのコンヴァンションに関わる場合、それぞれの生産様式において実施されているノウハウと学習過程

が強調される。採用される視角は、生産のコンヴァンションの起源と、これを活性化させる製品の分類とをめぐって、経済学者と歴史家の対話を可能とさせる。しかしレギュレーション理論がそうしたように、(因果連関によって説明することができる) 支配的生产世界を同定しようとするマクロ歴史的アプローチとは逆に、著者たちは、企業とその労働者たちの差異化された投資にもとづいた生産の世界の複数性の検証に依拠している。彼らは、1980 年代における市場的世界の発展と、規模とコストの経済に依拠した生産の工業的世界(フランス経済はそこではとりわけ成功を収めることができなかった)の相対的後退を解明する。彼らは、先端技術とデラックス製品に固有な範囲の経済に依拠する非物質的生产の世界の発展を予想するのである。

(2) コーディネーション形態の複数性

製品と人員についての様々な格付け様式に依拠し、労働市場と製品市場の分析を交差させるように促す、「品質のコンヴァンション」と「企業のモデル」についての Eymard-Duvernay (1987, 1989) の研究と並行して、サレとストーパーの研究は進められた。Eymard-Duvernay は、企業の結合が、より広範な社会的結合に巻き込まれていると考える。こうした社会結合が、企業メンバーによりなされるコミットメントと、その中でなされる意志決定に対して、公平性と政治的地平を与えるのである。彼のアプローチの特徴は、ボルタンスキーとテヴノーの『正当化の理論』により精緻化された行為の正当化モデルに依拠することで、より明示的に、倫理的次元を導入することにある。この『偉大さの経済 EG』モデルは、シテにおける「共通善」を構築するさいの複数のやり方を参照して、「正義の試験」の役割を強調する。

それぞれのシテにおいて、別の「共通善」は特殊な善へと縮減されるという意味で、これらの正義原則は競合している。ある一つの善へのコミットメントは、犠牲という形で、別の共通善への投資を制限することになる。こうして「市場的な善」

への投資は常に、伝統やパーソナルなアタッチメント(家内のシテに固有な)に依拠することなく、ビジネスに着手していることを想定する。市場的シテは、二つの「善」の観念(私有可能なモノ、倫理的目標)を混合することを可能とする。ビジネスによる富の機会主義は、広く競争を促す。したがって、富裕さはすべての人に恩恵を与え、富者は、自らの「善=財」の享受においてだけでなく、商業する可能性の増加、倫理的な意味での「善」としてかんがえられることの増加の中に、エゴイスティックな幸福を見いだすのである。

政治的な観点から、またとりわけ市場的装置もしくは工業的標準化の過程の拡張に直面して、不平等(報酬の、もしくは雇用や製品市場へのアクセスの)を縮減するために、偉大さの様々な秩序の間での均衡が強調されている。(フランス)国家はもはや、共通善の構築と実現を担う主要なアクターではないのである。そのうえ統計分類及び会計、製品の品質認証、人員の能力にかかるコンヴァンション的道具の分析は、1980年代以降、「規格による統治」へと収斂する規制の変容を解明することができる。

方法論的観点からは、企業の分布により産出される品質の分散の構成から、品質のコンヴァンションとマクロ経済的不均衡(失業率)の源泉との間での結合が描かれる(とりわけ労働市場のストックとフローの表象によって(Favereau, 1999))。逆の方向で、正義原則に基づいたコーディネーションの一般的形態の、媒介者によるローカル状況への調節の過程が強調される。こうしてL. Thévenot (1997)は、不均等なスケールをもった善を区別し、また人々の行為へのコミットメントを統御する異なったやり方(彼は文化的伝統にしたがって、その多様性を明らかにした)を区別するように促された。

労働市場の媒介者を中心とした研究はこうして、よりローカルなコーディネーション形態へと分析枠組みを移動させた。それは単に、コーディネーションの一般的装置の、状況への調節過程を研究することではなく、「専門家」の間でのコーディネ

ーション形態を展望することでもある。つまり専門家は、EGのモデルにおけるような、通常の意味でのコンピテンスを逃れるのである。そのうまい説明がなされるのは、求人広告のテキストの経験的研究と、(その様々な市場から引き出される)比較分析による、「労働市場の言語」の分析を対象とする研究によってである(Bessy et al., 2001)。アクター、とりわけ市場の媒介者により構想され動員されるこうした情報装置の分析が、雇用と候補者の格付けの様々な領域を明らかにし、コンピテンス評価のコンヴァンションの複数性を明らかにする。しかもこうしたコンヴァンションは体系的な対立的作用によって、一つの構造の中で接合されることがないのである。

(3) 批判と資本主義の移動

ダイナミックな観点からは、制度的変化は主として、製品と人材の(品)質評価の新しいコンヴァンションの登場にもとづいた社会的批判により説明される。ECのいくつかの研究は新しいシテの構築を明らかにしようとする。Lafaye et Thévenot (1993)は、「緑のシテ」の確立に関心を向けるようになり、どのように、エコロジ的主張が徐々に公的討論を打ち立て、環境保全や製品及び雇用の品質の再定義がその企業戦略へと統合されているかを説明するのである¹⁾。より一般的に、ECは共通善や、少なくとも大きなスケールの善に準拠した批判の内生化の形態に基づいた企業利潤の源泉に関する一連の詳細な研究を生み出した。こうした観点から企業の社会的責任に関する研究が教えるところが多い(Nadel, 2013)。

多くのECの経済学者の注目を集めるのが労働世界の変容である。よりいっそうのフレキシビリティと個人化へと向かい、また(長期でのキャリア組織化と所得分配の調整を可能とする)産業別団体交渉と雇用格付けシステムを疑問視するような、評価のコンヴァンションを彼らは解明するのである(Bessy, 2007)。それは『資本主義の新たな精神』においてボルタンスキーとシアペロにより明らかにされた「プロジェクトのシテ」の興隆と

結合される。結局、そこで記述されている運動は、それ以前の資本主義段階において制定されたカテゴリー化の現在における疑問視なのである。こうしたマクロ歴史的な進化は労働関係の個人化によって説明される。労働における自律性と責任という名の下で、厳格な分業に基づいた巨大組織のルール of 厳密性への 1970 年代の批判の源泉となったのが、この個人化である。標準化された生産過程へのこうした批判は、プロジェクトの新しいシテの精緻化の前提を提示することになる。社会的世界のあらかじめの制定に依拠した制度化された正当化の試験を実施する困難のために、フレキシビリティの要請が、こうしたプロジェクトのシテを脆弱化させるのである。

しかし『資本主義の新たな精神』の著者たちによりなされる重大な方法論的立場の修正は、「批判」が制度進化の唯一の駆動力ではない、ということである。正当化の試験の外側に、利潤の新しい源泉の探求により動機づけられるマイクロ移動全体を考慮しなければならない。こうした正当化の試験が、企業の中で実施されている組織形態と評価様式に影響を与え、制度的ルールを広く作り出すことができる（集团的熟議形態を経ることなしに）。著者たちは、エージェント、とりわけ最も「偉大な」エージェントが、新しい利潤の道を探求して、（正義の公的試験を迂回し、批判をいっそう困難にさせる）力の試験をたどる際の移動のレジームを解明するのである。

したがって「偉大な」エージェントたちはルールを超えており、その『批判について』において、「責任ある階級」としてボルタンスキーが描写していることの共通の特徴をなしている。この著書の中で、彼は批判の社会学と批判的社会学との間の中間的な道をたどろうとし、「支配」と「社会階級」の概念に立ち返り、こうして力の試験に重要性を与えるのである。この「責任ある階級」を特徴付けるために、ボルタンスキーがとりわけ新しいマネージメント手法（ベンチマーキング）の道具主義的側面を示すのは、以下の意味においてである。すなわち採用されている措置は、イデオロ

ギー的言説や真実のテストの広範な展開を要請することなく、会計もしくは法的な枠組みの中に、自らの必要性を見いだすのである。その技術的特徴は、広範な大衆へのその表明を無用とさせ、「規格による統治」（Thévenot, 1997）を促す²⁾。結局、ボルタンスキーは、諍いと視点の収斂を社会的結合の中心に置くべく、暗黙の合意という観念を放棄する。この意味において、彼は制度に固有な解釈学的矛盾、「信念」と「批判」との間での永続的緊張に言及することになる。

エスケールとの共著の中で、著者たちは支配階級の特徴付けの問題と、いかにしてこのメンバーたちが共通利害を構築しているのかについての問題とに立ち返るが、それは、こうした階級が、何が価値があるのかについての定義を巡るその権力をいっそう増加させることがどのようにして可能となるのかという視点をとることによってなのである。

2. 価値と価値付与権力

一般的に、評価形態に関する (Vatin, 2009, Lamont, 2012)、また金融市場もしくは別の商品市場、競売での (Callon et Muniesa, 2005) 価格の具体的設定の問題についての考察を促したのが、評価のエンジニアリング（経済の金融化とかなり結合している）の発展なのである。

しかし、価値の問題についての再検討において、オルレアン of 著作（『価値の帝国』）が、（金融市場の実質的アプローチ——効率性の経済理論によって擁護されている——に対して彼が向ける批判のために）決定的な役割を演じた。結局、米国において、2007-2008 年に展開した「サブプライム」危機は、金融債券の評価の根本的危機を明らかにしたのである。この場合、オルレアンは、模倣的過程の検証によって、金融市場の作用をとらえようとするが、我々は以下で最初にこれを提示しよう。我々は次いで、価値付与形態の普及を理解することを可能とさせる媒介全体を考慮することで、この模倣モデルを批判する。よりプラグマティックな、こうしたアプローチは、市場の特定の媒介

者の価値付与権力を強調し、このことは、最終的に、権威と力関係の間での、この権力の源泉について検討するように促す。我々は、クライアントが製品の品質評価にどのように貢献するかについて、この節を結論づける。

(1) 模倣的モデルと価値のコンヴェンションの起源

金融市場の機能、とりわけ投機バブルの登場を解明するためにオルレアン『『価値の帝国』』は、体系的に、経済アクターの行為の研究に、とりわけ、資産価値（流動性の秩序に属する）への彼らの集合的信念に関心を向ける。これは貨幣もしくは別の準流動的資産（取引可能な証券、銀行貨幣）の価値への持続的信念を目的としている。もっとも、経済的功利主義の観点からは、ある財の価格は、自然経済に従って、その使用価値を得るために必要な犠牲の、状況的、客観的測定でしかないのだとしても。

模倣的競争のモデルは、所与の背景において「価値ある」ものの集合的信念の形成を論理的時間の中で説明する。その説明は EC の根本的考えと一致する。つまりコンヴェンションは、個人的行動の帰結としてと同時に、アクターを制約する枠組みとして理解されなければならない。オルレアンのアプローチの種別性は、価値を有するものについてのコンヴェンションの登場に関して、それを意図的な（熟考された）過程と見なさないように用心することである。彼のモデルにおいて、各人は自らの「利益」を追求し、コンヴェンションの選択は模倣的な自動生産の図式に従う。こうした選択は、金融共同体のメンバー全体に共通した評価枠組みに基づいた熟議（それはウェーバーの意味での「コンベンション」の考え方である）の帰結ではない。それでもオルレアンはシステム・レベルでの因果的な説明と、より理解的な説明とを連結させようとする（ミクロ的背景における行為の様々な動機を考慮することで）。

(2) 市場の媒介者の価値付与権力

そのほかには、評価コンヴェンションの定義と、その創出および普及における市場媒介者の役割の定義については、オルレアンはそれほど多くを語らず、このことが媒介者の価値付け権力の問題を提起する。こうした観念は当初、最終的に何が価値があるかについて語る能力という意味で、企業における権力を考慮するために、Eymard-Duvernay(2012)により展開された。以下のことが強調されることになる。すなわち価値付けの政治的次元、つまり付加価値の再配分および民主主義の争点、さらには従業員の要求を犠牲にしての、

（競争のみに集中したすべての装置により補強される）クライアント、もしくは株主（金融評価技術を通じて）といった企業の特定のステークホルダーによる付加価値の横領のリスクである³⁾。こうした考えは、今日、国家の特定の後退に直面して、企業が、これらの三つの権力の間での裁量（広く、管理者の手中にゆだねられた裁量）の根本的な場所を構成するであろう、ということである。

我々は、評価枠組み（異なった度合いの一般性を有する）の定義における市場の媒介者の権力を考慮するために、ここで、価値付与権力という考えを採用しよう(Bessy et Chauvin, 2013)。

よりいっそう正確に、金融資産の評価コンヴェンションに関しては、Montagne (2009)の研究が、投資基金の運営が、いかに、サービス給付市場（コンサルタントや権利者、評価の市場）を創出すると同時に、短期を支配的経済時間制として制度化するのかを示している。パフォーマンスを「測定する」ことができると考えられるコンサルタントや様々な媒介者の隆盛が、結局、監査法人を、量的（パフォーマンス）および質的（組織的監査）な二重の制約と、全般的競争の下に置くのである。

モード、さらにはきらびやかな事物の選定は、オルレアンの模倣的モデルの別の適用領域をなしており、選好の内生的次元をうまく解明することを可能としている。しかしテキストスタイルにおけるモードのトレンドの具体的分析は、いかに、こうしたトレンドが、もっともイノベーティブと考え

られているイタリアとフランスのテキスタイル製造業者の協調過程にしたがって作り上げられているかを示している(Rinallo et Golfetto, 2006)。こうしたトレンドの生産への協力過程は、様々なアクターの間でのコーディネーションを改善するために、細分化されたテキスタイル衣服産業と、テキスタイル製品の品質（色や構造、概観、手触り、装飾、扱い）についての不確実性を縮減する必要性に対応している⁴⁾。

一般的に財や資産の評価枠組みの構想と普及は、多数のアクターの間で、またアクターと社会物質的装置との間で分散されている。モードのトレンドの上述の例が示すように、モノの間での差異の妥当な定義のコントロールは一握りのアクターの手中にあり得る。こうして強い価値付与権力を付与された市場の仲介者が、多様な時間的空間的な段階を通じて、評価のコンヴェンションを定義し、普及することで、決定的な役割を演じるのである。

もう一つ別の問題は、この価値付与権力の起源に関わる。第一の起源は、広範な範囲を持ちうる共通善に準拠する評価コンヴェンションを定義するさいのアクターたちの正統性に依拠する。しかし市場の媒介者の正統性を超えて、彼らの価値付与権力の説明の二つの別の起源（たんなる力関係を越えた）に言及することができる。すなわち媒介者の象徴的資本(Bourdieu, 1993)、もしくは翻訳と媒介の様々な操作のおかげで、特殊な評価枠組みを使用するさいのアクターたちの徴用のその能力である(Latour, 2005)。価値づけ権力のこうした様々な説明は、オルタナティブとして考慮することができるが、これらの異なった影響力の間での明確な区別は、モードのトレンドについての上述の研究が示すように、経験的に検証することが困難である。そのうえ特定の主要なアクターはこうした評価コンヴェンションを利用する十分な理由を有する。というのも彼らは評価枠組みの構築に多く投資してきたし、もしくは彼らは「資産」を保有し、この資産はこの評価枠組みにおいてより良く価値付与されるからである。こうした評価枠組みは、批判を予測することで、またその利潤

を増加させるために批判を内生化させることで、それを戦略的に使用するように彼らを促すからである。

(3) クライアントによる支配

企業にとって、市場の制約は最もしばしば、同一とされる製品をめぐる、その競争相手により提示される価格水準によって表明される。このことは、この企業に対してその製品を差別化するように、また「市場的生産の世界」(Salais et Storper, 1993の言葉を借りれば)におけるように特別なクライアントを捉えるように促す。さらには需要者が、(生産者の専門特化した知識から利益を得ることで)自らに完全にあつらえられているような製品を希求する「インターパーソナルな世界」においてもそうである。この第二の場合において、クライアントは、客観化可能なままである交換枠組みに留まりながらも、提供される給付にとって基準となる。しかしよりジェネリックな製品についてさえ、企業は、出荷の時期と場所に関して、もしくは製品の物質的特徴に関して、クライアントの特別な要請を考慮することができるような交換装置を実施する。

使用者もしくはクライアントの共同体は、(ゲーマー=消費者の支配の形態と、ヘテロなコミットメントの、市場的資源への変容を導く)ビデオゲームの構想の研究が示しているように、企業によって活動領域を活性化されることができる(Cocq, 2016)。Thévenot (2015)は、企業が、価値づけの偏差 *differentiel* を我が物とし、そこから利益を引き出すという事実を考慮するために、この過程を「価値づけの越境 *transvaluation*」として描いている。

その価格を批判し、もしくは正当化するために、モノを比較し、もしくは差別化させ、これを価値づけるさいの異なったやり方を区別することで、ボルタンスキーとエスケールの著作が関心を向けるのが、まさにこうした偏差なのである。こうしたスタンスによって、L.Karpik (2007)の特異性の経済の分析よりもいっそう先まで行くことができ

るのは、差別化と「独占的競争」の資源を増加させることによってであり、こうした資源が、市場のプロと（彼らが行う）マーケティング技術（価格戦略を含む）との伝統的商業財産をなしているのである。

3. 豊穡化

『豊穡化』という著作のオリジナリティは、金融的蓄積もしくは労働の剰余価値という伝統的手法とは異なった利潤探求様式を強調することにある。というのも著者たちが情熱を傾けるのが、F. ブローデルの資本主義分析を採用することで、とりわけ富者に向けたデラックス財の商業と関連した、市場的「剰余価値」に基づいた豊穡化の機会の分析に対してである。それは理論的観点からも意欲的な研究である。我々は既に、概念的構築についてのボルタンスキーの好みを知っている。EGのモデルは当時、既に、レヴィ=ストロースの「親族の基本構造」に比較されていた。ある種の構造主義を擁護するこの新しいエッセーと共に、彼はまた、方法論的な立場の変化、あるいはむしろ異なったスタンスの間での微妙なゲームを好んでいる。それは既に彼が、支配的イデオロギーの生産についての、ブルデューとの共同研究を再録することで、彼が既に行っていたことでもある(Boltanski, 2009)。そこでは EC により通常処理されている価値づけのコンヴェンションの形態と、批判的社会学における象徴的形態による支配の権力とを接合することが重要である。

この著書の第一部は、資本主義的生産の経済に関する歴史的軌跡の中にこの経済を置き直すことで、豊穡化の経済に向けられ、かくして、その共進化の分析に向けられる。第一部は、脱工業化と、低賃金諸国への生産拠点移動戦略や、豊穡化の経済の並行的成長（とりわけ娯楽や区別立の家産的経済において伝統的に考えられている財の、資産的資本 *capital actif* への変容に基づいている）により説明される欧州資本主義の再編を説明する。過去を高付加価値化する、こうした新しい経済が、1980年代以降実施されている文化政策により促

されてきたというのが、フランスの特殊性であり、こうした政策は、「官民連携」の形で、（デラックス製品の産業がますますその多くの割合を示すことになった）「文化産業」全体を促進し、このことが様々な領域の間での専門家たちにとって、利害対立のリスクを増加させる。

ある種の国家独占資本主義を当世風にさせるこの部分については立ち返らないでおこう。また、自営業 *auto-exploitation* や無償労働に基づいた企業モデルの形態の登場と共に、そこから登場する新しい階級の社会学を提案する本書の最終部分についても触れないことにしよう。しかし「市場的シテ」において、「偉大な人々」の富は、より「卑小な人々」の善にも貢献するのに対して、富者の新しい階級の飛躍は、より貧しい人々の排除をもたらし、社会的不平等を増大させるのである。

我々は、追求されている方法論を提示することで、本書の第2部と第3部に焦点を当て、モノの価値づけのそれぞれの形態、批判と価値、価格の間での結合を取り上げる。

(1) 構造主義と資本主義

グローバルなレベルで、利潤を巡る体系的競争メカニズムは、資本の蓄積を可能とするために、より利潤のある市場空間の探求への資本家の移動をもたらす。「移動」という概念は、『資本主義の新たな精神』におけるよりもいっそう、おおざっぱな意味で使用されている。そこでは、著者たちは、移動を、正当化の制約なしに制度的規則の進化の駆動力としている。いずれの場合でも、商品であろうと人員であろうと、資本であろうと様々なタイプの移動を検討することで、また倫理経済から脱却することで、剰余価値の増大を分析することが眼目である。

リアリティについてのこうした突出したスタンスがマクロ歴史的レベル（システムレベル）では有効であるが、それは自らの活動によって、こうしたダイナミズムを促すアクターたちの反省性（プラグマティックなレベル）を説明しないのである。著者たちにとっては、みずからが「プラグ

マティックな構造主義」(p.495-502)とよぶ形態にしたがって、こうした二つの定まったレベルを接合することが重要なのである。そのために、彼らは、資本主義的企業（力関係の設定を可能とさせる偏差 *differentiel* を利用することを目的とする）と、自動調整的市場という自由主義的観念（妨害的行為と並んで、支配的地位の濫用も同時に罰する）との間に、ブローデルがもたらした区別に依拠する。ところが、とりわけ必需品について、供給側が力関係を利用して、完全に市場をコントロールするような状況は希である。供給側は、たいていの場合、様々な価値づけ形態や、言説を媒介にして構造化されたコンヴェンションのゲームに依拠して、自らの価格を正当化しなければならない。したがって商品化過程は、交換と製品価格のコンヴェンションに依拠し、これらをどのように格付けするかは共有されたやり方に依拠している。これらの価値付与形態が、市場登場者全体に対して、（彼らをお互いに調整させ、紛争を解決することを可能とさせる）知覚と評価の共有された図式と記述言語を供給していることを強調するために、著者たちは明示的に EC に言及するのである (p.154)。

このように著者たちは人類学的脈絡から商品の構造を同定しようとしたが、これは彼らに対して、モノの価値づけの4つの形態を区別するように促す。こうした形態は、「変容のグループ」（彼らがレヴィ=ストロースから借用する概念）の中で補完的に接合されている。同様の構造論的脈絡から、モノの価格は、それ自体では内容を持たず、他の価格との関連でのみ内容を持つ記号として考えられる（かなり類似した、もしくは極めて異なった、モノについての別の交換により明らかにされる）。著者たちにとっては、相対価格の構造が社会的現実の重要な要素をなしており、アクターに対して、認知マップのように、自らを方向付け、交換の不確実性を縮減させるのである。彼らはこの場合、富の創出の新しい源泉の登場と関連した、相対価格の構造の現代的歪曲にも関心を向ける。

(2) モノの差異化の形態

著者たちによって、モノは二つの軸にしたがって区別される。一つの差別化の軸は、商品の提示の分析的及び物語の様式を対立させる。もう一つの軸は、モノの商品的力強さを関連づける時間軸であり、時間とともにモノが評価を下落させるかそれとも高く評価されるかである。それぞれの価値づけ形態は、これらの二つの軸にしたがって、同一であると同時に差別化される。このことは4つの形態を接合する変容グループの構成をもたらす（表を参照）。

「標準的形態」から始めよう。これは、プロトタイプ of 差別化に依拠し、それぞれのプロトタイプはコード化されており、しばしば特許やモデルにより保護され、大量生産の自動車のようにアプライオリに、少数の見本 *speciment* の生産をもたらすことができる。こうしたプロトタイプは、極めて専門化された知識を統合することで、極めて差別化されていることもできるし、もしくは、ほとんど差別化されていないこともできる（日常消費用品のように、生産技術が標準化されていることで）。Salais et Storper, 1993 の対立物が見られる。その違いは、製品の耐久性、つまり時間を通じたその価値の衰退（使用を通じて、もしくはかなりプログラム化された摩耗により廃棄物となるまで）を特徴付けている時間軸の導入である。

逆に、「コレクションの形態」が価値づけるモノは、単なる商品としてのその使用ではなく、シリーズ全体 *ensemble seriel* におけるその位置に由来する。モノは、しばしば物語的手続きにより喚起される、その記憶的力にしたがって、時間と共にその価格を増加する。コレクションは特定の関係（スタイル、時代、テロワール、事物のタイプ、作家、蒐集家）の下に、近いと考えられるモノ、妥当であると通常、考えられている差異にしたがって流通させられるモノを結集させる。これが、不足を登場させ、その典型が切手蒐集である。コレクションは偏差的軸に並べられ、同定されたプロトタイプの見本の集合に基づくモノ（マッチ箱のような）と、プロトタイプのみからなるそれ（芸

術作品のように唯一の見本が関連づけられる)を区別する。二つの間に、今日、デラックス製品が作り出しているような、短いシリーズで製造される事物のコレクションが見いだされる(時計、高

級自動車など)。これは、蒐集家のエートスをまとった買い手に向けられた価値づけ形態を道具化しているのである。

表 モノの価値づけ形態のまとめ(追求されるモノの主な品質)

	分析的提示	物語的提示
時間の商品力(-)	標準形態：使用の品質	トレンド的形態：社会的区別の品質
時間の商品力(+)	資産形態：利潤ある再販の品質	コレクション形態：シリーズ全体での位置

(出所) Boltanski, L. Esquerre, A. (2017), (P.159) 筆者により修正。

「資産的形態」の場合、モノの価値は、即座のもしくは近未来における(時間軸)、その流動性への、その貨幣転換の度合い(偏差的軸)への信念に依存する——その他のすべての特性を除いて、その会計的翻訳(分析的提示)のみを考慮して——。投機に固有なこうした価値づけ形態は、模倣的過程に依拠することができる。しかしながらそれは、資産の(メタ)価格の安定性のみならず、その流動性を保証する正統な媒介者の存在を前提としている。それは、競売会社の場合であり、これは、金融投資や商品先物取引と並んで、現代において顕著な発展を遂げたのである。

結局、「トレンド的形態」は、その価値づけ形態が、「コレクション形態」のように物語性に基づいているモノで、社会的ヒエラルキー(金持ちと貧者、青年と高齢者など)によって構成された市場において欲望を喚起させるモノに関わる。例外性の形態に関連づけられるこれらの事物は、それを使用することによって、急速に価値下落するのではなく、大量生産がその価値下落を発動するからなのである。そこでもまた、モードの効果は模倣的過程に依拠することができるが、しかし同時に市場の媒介者(イノベティブな企業グループやトレンド予測調査会社のような)にも依拠する。しかしついに有名となったクリエイターもしくはデザイナーによるその署名が、この製品に区別立ての効果をもたらすに至るや、トレンド製

品は、長期にわたる忘却期間の後に、「コレクション形態」へと転換を遂げることもできるのである。

商品の二重の特徴付けにより、著者たちは、その商品の再生産と、特定の支配的アクターによるそのコントロールの問題に着手することができる。こうしたアクターは価値づけのそれぞれの形態に特有な一連の対立(プロトタイプ vs 見本(標準)、オリジナル vs コピー(コレクション)、本物 vs 偽物(資産)、モデル vs 模倣品(トレンド))によって、妥当な差異についてルールを定めるのである⁹⁾。こうした問題は、欠如をどのように埋めるか、それぞれの価値づけ形態においてどのように消費を促すかに関連している。すなわちこうした価値づけ形態は「不完全な全体」(コレクションにおける欠けたピース、ショーウィンドーのなかで物色されるトレンドイヤーな衣服)、「不完全なモノ」(将来における機能性(標準))、市場での希少な資産を描き出す。

最終的に、これらの価値づけのコンヴェンションは、商品に転換できるモノの領域をできるだけ拡張させる(こうした拡張を制限する倫理的、法的な制約の下で)。しかし著者たちは異なったタイプの批判、とりわけ価格水準に関わる批判を考慮する。

(3) 批判と価値、価格

最初のタイプの批判は価値づけの形態の拡張に

関連している。結局、それぞれの形態は「厳密に」も「柔軟に」も考えられるのであって、類推と比較によって、新しい事物を形態の基準によって検討する。コレクション形態の拡張の好例は、現代芸術作品の生産の包摂であり、それは、こうした生産が、あたかも、文化遺産の一部となるように、不滅となることを目指されているかのように、過去に属するように、扱われているという事実によるのである。そしてこうしたゆっくりとした文化遺産化こそが、ツーリズムに有利なこうした形態を中心として、文化活動や美食、偉大なワイン、（豊穰化の経済に参画する大日刊紙の日曜版で記述される）多くの事物を結集させるのである。こうした事物は批判の手がかりを与えることができる。文化的「未開地」の文化遺産化、もたらされる不平等について、アルルの町の典型的な例によって、著者たちが批判をおこなっているように、また工業社会の展開が、徹底した標準化のために批判されてきたように、である。

それでも、一般的に、価値づけ形態の複数性は資本主義に対して、自らに対してなされる批判を吸収することを可能とさせる。すなわち標準製品の、コレクション形態でのリサイクル、もしくははそのトレンド製品へのアクセス（社会的上昇を可能とさせる）によってである。しかし、著者たちにとっては価値づけ形態が明示化されるのであり、倫理的価値と経済価値を区別することで、その倫理的な延長から自らを切り離すのである。

こうして彼らは、価格の批判と正当化の装置として、（経済的）価値の仮説を提示する。こうした仮説によって、需用者に対して、価格を批判することを可能とさせると同時に、供給者に対して、価格を正当化させ、もしくは批判を予測させることを可能とさせる（広告的装置に依拠することで）。こうしたオペレーションは、同等なモノの価値を設定するような「メタ価格」と実際の価格の比較に基づく。「（メタ価格とは）すなわち実際の交換の結果としてでなく、数値的に翻訳される価値の評価である（制度によって表明されようと、アクターの判断により生み出されようと——こうした

アクターは、自らが熟知している事例に基づき、もしくは想像上の評価、ないしは自らの夢に身を委ねる——、さらには使用によって規定されていると）」(p.141-142)。我々は、「交換価値」と「使用価値」との間の経済学における古典的な区別とはそれほど遠くないところにいる。使用価値の決定は、市場でのモノの価値づけの様々な形態に依存しているという考えによって、である。

我々の著者たちが関心を向けるのは商品の交換であり、したがって儲かる機会なのである。エージェントたちは、（例えば生産もしくは再分配のコンフリクトを解消することを可能とさせる）別の偉大さの秩序に依拠する必要もないのである。さらに著者たちは、商品の価値づけ形態の多様性が、モノを取得する欲望（構造的性向）を、したがって豊穰化の源泉を増大させる、という仮説を立てる。

(4) 批判的展望

こうした分析が、資本主義的利潤の探求の現代的様式をくっきりと浮き彫りにさせるのは、豊穰化の経済と関連した支配階級の、また被支配的階級（搾取されつつも、これに参画する）の登場を強調することによってである。『資本主義の新たな精神』におけるように、各人が資本主義の展開に貢献するのは、アリーナのタイプに応じて、経済的価値づけの形態を参照して、より倫理的な偉大さの秩序（再分配の不平等の問題を提起する）を参照して、さらには消費主義への抵抗のよりラディカルな行動を参照して、自らの批判的能力を保持しつつ、そうするのである。

こうした価値づけの形態は、製品の間での通約可能性もしくは不可能性のルールに応じて経済競争を組織することで、商品世界を構造化するのに貢献する。このことは競争過程、とりわけ競争相手の模倣過程の詳細な分析を可能とさせる。著者たちが、こうした分析から、それぞれの価値づけのコンヴェンション的形態に固有な不正の経済、その戦略的使用の経済、それと関連した真正化の政治についての多くの重要性を引き出していない

のは残念なことである。彼らが、新しい製品への投資の保護を目的とする工業的知的財産権（標準的形態もしくは高級品やテロワールの製品についてのコレクション形態）もしくは固有名のいっその役割に言及するとしても、豊穣化の経済に固有な、その他の法律領域は検討されていない（文学及び芸術の所有権、文化遺産法、真正化の法）。

文化的「未開地」の文化遺産化の分析はとりわけ成功しているが、「共通善」の創出についてはほとんど語られていない。「コモン」への唯一の言及がなされるのは、以下の事実を説明するためにである。つまり富者の共同体が関心を有するのは、集会的労働が遺産を維持し、その価値を保証する限りのことである。文化遺産の法律が「コレクション」形態を支えるのは、記憶の力を保証し、あるいはより単純に、保護されるべき実体の同定と真正化の手続きを法的に定義し、認証することによってのみである。しかし「共通善」の概念はEG（偉大さの経済）モデルの構築とは関連づけられておらず、またこの概念は、ここで、過去を典型とすることで、「誰にも帰属していない」ことを特徴付けるために使用されていることが残念に思われるかもしれない(p.485)。

さらに、文化遺産の法律は、(資源の共通の特徴——共通の遺産もしくは国民の遺産、公的国有、公共への付与、譲渡不可能性——を、様々な形で強調する) 法的な様々な格付けに言及して、コレクションにより構成される富へのすべての人の自由なアクセスを目的とすることができる。Bellivier et al (2015)は、今日のコレクションが蒐集家の伝統的論理といかに断絶しているかを示している。その価値付与の必要性（保存費用のために）が特定の排除性の形態をもたらすとしても。こうして作られつつあるコモンズの権利に言及して「記憶の場」の再領有の集会的活動を研究することが重要である。このことは、そこから物質的利益を直接引き出すためにではなく、その脆弱性を解明するために、モノへの別の注目の様式を促すのである⁹⁾。

結論

市場での製品の評価とその生産を接合する「品質のコンヴェンション」の複数性の解明によって、ECは、現代における企業及び市場の組織様式の変化を説明することができた。資本主義の変容のこうした分析は、支配的生産様式の解明というよりもむしろ、これらの異なったコンヴェンションの間での緊張（それぞれのコンヴェンションがコーディネーションと、不確実性縮減の権力を持つ）の研究に基づいている。しかし1980年代以降のあらゆる種類の不平等の高まりは、ECに対して、企業や市場、またより一般的に経済の中での特定のアクターの価値づけ権力に関心を向けるように促したのである。コンヴェンションのコーディネーション権力から、(評価のコンヴェンションの定義と普及における) 支配的なアクターの価値付与の権力へと焦点をずらすことで、ECの研究プログラムは、(様々な段階に応じて、競合的であると同時に補完的な) 価値付与権力の(資本主義的) 構築物の解明へと向かった。

こうした移動は部分的には、EC経済学者とボルトンスキューとの定期的な対話による。彼のEsquerreとの近著は、いかにECが権力の問題を扱うかについて考察するさいの新しい素材を与え(Thévenot, 2016)、倫理経済学から脱却することで、資本主義のより体系的分析を提案するさいのその能力を与える。結局、『豊穣化』の著者たちは、ブルデューの批判的伝統に接近しながら、新しい支配階級の特徴と、モノの間での妥当な差異の定義のその権力（法律を含む）を描くに至ったのである。しかしこの第二の点について、とりわけ知的財産権のコントロールについて、いっそう検討を進めなければならないであろう。

さらに、特定の価値づけの形態がどのように別の「善＝財」の探求を妨げるのかについて検討しなければならない。遺産の問題について我々が見てきたように、ある財やサービスの領有や使用のルールを採用することで、人々は「コモンズ」を基礎づけることができ、それを保護し、発展させるために、資源や特別な富の価値づけ形態を創出

することができるのである。

【原注】

- 1) ドイツのワイン市場についてのエコロジ的コンヴェンションの登場について Diaz-Bone (2013)による分析を参照せよ。
- 2) 計算手法の同様の支配の展望において、Thévenot (2015)は、製品の品質認証の多国籍的標準による政治の略奪のリスクを検討している。
- 3) 著者はマクロ経済的なレジームの時代設定をそこから引き出し、レギュレーション理論との結合とりわけ、「フォード主義的」時代において労働者はその黄金時代を有したこと、また彼らは1980年代以降、金融化とともに、また国際競争とともに、さらに低賃金諸国への生産拠点の移動とともに、この時代を喪失したという考えを引き出した。
- 4) さらに、市場を表象し、それを到来させるさいの、集合的能力はアクターの間に不平等に配分され、このことについて、著者たちは、ブルデューにしたがって、象徴的資本の差異に帰し、徐々に、最初のイノベーターたちに、新しいトレンドを押しつける地位と正統性を与えている。
- 5) とりわけ芸術作品の場合において、それが作家に準拠して真正化されればされるほど、その価値について、したがって再販の場合の潜在的利潤について、より多くの保証を得るのである。
- 6) この点に関して、資本主義が被っている変容のプラグマティズムの分析について Chateauraynaud, Dabaz (2017)を参照せよ。

【参考文献】

- APPADURAI A. (1986), 'Introduction: Commodities and Politics of value. In *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, edited by Arjun Appadurai, 3-63. New-York: Cambridge University Press.
- BELLIVIER F., BENHAMOU F., CORNU M., NOIVILLE C. (2015), « Collections muséales et collections

biologiques : de la conservation à l'accès, in *Le retour des communs. La crise de l'idéologie propriétaire*, B. CORIAT (éd.), Paris, LLL, pp. 197-222.

- BESSY C. (2019) « UN RENOUVEAU DE LA SOCIOLOGIE DES PRIX ET DES MARCHES », *L'ANNEE SOCIOLOGIQUE* (A PARAÎTRE).
- BESSY C. (2007), *La contractualisation de la relation de travail*, Ed. L.G.D.J., collection Droit et Société, Série Economie.
- BESSY C., Chateauraynaud F. (2014), *Experts et faussaires, pour une sociologie de la perception*, Editions Petra (1^{ère} édition chez Métailié, 1995).
- BESSY C., CHAUVIN P.-M. (2013), 'The power of market intermediaries: From information to valuation process', *Valuation Studies*, 1(1): 83-117.
- BESSY C., EYMARD-DUVERNAY F., de LARQUIER G., MARCHAL E. (coordonateurs) (2001), *Des marchés du travail équitables ? Une approche comparative France/Royaume-Uni*, Bruxelles, P.I.E.-Peter LANG, octobre.
- BOLTANSKI L. (2009), *De la critique*, Paris, Gallimard.
- BOLTANSKI L., CHIAPELLO E. (1999), *Le nouvel esprit du capitalisme*, Paris, Gallimard.
- BOLTANSKI L., ESQUERRE A. (2017), *Enrichissement, une critique de la marchandise*, Paris, Gallimard.
- BOLTANSKI L., THÉVENOT L. (1991), *De la justification. Les économies de la grandeur*. Paris, Gallimard.
- BOURDIEU P. (1993), *The Field of Cultural Production*. New York: Columbia University Press.
- CALLON, M., MUNIESA F. (2005), "Economic markets as calculative collective devices." *Organization Studies* 26 (8): 1229-1250.
- CHATEAURAYNAUD F., DEBAZ J. (2017), *Aux bords de l'irréversible. Sociologie pragmatique des transformations*, Paris, Editions Petra.
- CHIAPELLO E. (2016), « Financiarisation et outils de gestion », in *Dictionnaire non standard des conventions, autour des travaux d'Olivier FAVEREAU*, BATIFOULIER P. et ali eds, Presses Universitaires du Septentrion, pp 139-144.

- COCQ M. (2016), “Mettre les joueurs au travail”, WP de l’IDHES.
- DIAZ-BONE R. (2013), « Discourse conventions in the construction of wine qualities in the wine market », *Economic Sociology - European Electronic Newsletter*, 14(2) : 46-53.
- EYMARD-DUVERNAY F. (1987), « Introduction : les entreprises et leurs modèles », in *Entreprises et produits*, Cahiers du centre d’études de l’emploi, n°30, pp. V-XXII.
- EYMARD-DUVERNAY F. (1989), « Conventions de qualité et formes de coordination », *Revue Economique*, Vol. 40, n°2, p. 329-361
- EYMARD-DUVERNAY F. (2012), « Le travail dans l’entreprise : pour une démocratie des pouvoirs de valorisation », in B. ROGER (dir.), *L’entreprise : formes de propriété et responsabilités sociales* (pp. 155-218), Lethielleux/collège des Bernardins, Paris.
- FAVEREAU O. (1999), « Salaire, emploi et économie des conventions », *Cahiers d’économie politique*, n°34, pp. 163-194.
- FAVEREAU O. (2014), *L’entreprise, la grande transformation*, Paris, Parole et Silence, Editions Collège des Bernardins.
- KARPIK L. (2007), *L’économie des singularités*, Paris, Gallimard.
- LAFAYE C., THÉVENOT L. (1993), “Une justification écologique? Conflits dans l’aménagement de la nature », *Revue française de sociologie*, vol. 34, n°4, pp. 495-524.
- LAMONT M. (2012). “Towards a Comparative Sociology of Valuation and Evaluation.” *Annual Review of Sociology* 38: 201-221.
- LATOUR B. (2005). *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. New-York: Oxford University Press.
- MONTAGNE S. (2009), “Le court-termisme institutionnalisé: les effets de la gestion de portefeuille déléguée,” *Revue d’Economie Financière*, p. 417-432.
- NADEL S. (1993), « La RSE comme forme de justification : quels impacts sur le travail ? », *Revue française de socio-économie*, n°11, p. 165-179.
- ORLEAN A. (2011), *L’empire de la valeur. Refonder l’économie*, Paris, Editions du Seuil.
- RINALLO, D., GOLFETTO F. (2006), Representing markets: The shaping of fashion trends by French and Italian fabric companies. *Industrial Marketing Management*, 35 (7):856-869.
- SALAS R., STORPER M. (1993), *Les mondes de production : enquête sur l’identité économique de la France*, Paris, Editions de l’EHESS
- STEINER P. (2011), *Les rémunérations obscènes. Le scandale des hauts revenus en France*. Paris, Zones.
- THÉVENOT L. (1997), « Un gouvernement par les normes. Pratiques et politiques des formats d’information », in B. CONEIN et L. THÉVENOT (eds), *Cognition et information en société*, Raisons pratiques, n°8, pp. 206-241.
- THÉVENOT L. (2015), « Certifying the World : Power Infrastructures and Practices in Economics of Conventional Forms », in Patrik Aspers and Nigel Dodd (eds), *Re-Imaging Economic Sociology*. Oxford: oxford University Press, pp. 195-223.
- THÉVENOT L. (2016), « Le pouvoir des conventions », in *Dictionnaire non standard des conventions, autour des travaux d’Olivier FAVEREAU*, BATIFOULIER P. et ali eds, Presses Universitaires du Septentrion, pp 203-206.
- VATIN F. (2009), *Evaluer et mesurer: une sociologie économique de la mesure*. Toulouse, Presses Universitaires Mirail-Toulouse.
- VELTHUIS O. (2007), *Talking prices: symbolic meanings of prices in the market for contemporary art*, Princeton, Princeton University Press.

(訳注：原文は *Revue Française de socio-économie* 誌に掲載される予定の原稿の草稿である。最終稿については同誌を参照されたい。また

本稿が³Boltanski L., Esquerre A. (2017)のコンヴァンション経済学からの読解をなしているのに対して、*L'Année sociologique* (à paraître)誌掲載予定のBessy (2019)はCallon (2017)についてのそれをなしている。併せてベッシー著「価格と市場についての社会学の刷新」『横浜国立大学教育学部紀要』(2020)を参照されたい。またボルタンスキー、エスケール著「資本主義の新たな形態としての『コレクション』: 過去への経済的価値付与とその帰結」、『阪南論集』52 (2), 2017 も参照。